



徳川實記抄録

二六

特別

又5  
2142  
6



有德















Handwritten text in cursive script, likely the beginning of a letter or document.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous page.

Handwritten text in cursive script, continuing the text from the previous page.















作得たる河堤く天下一の流の流業の心なり

台徳院殿あまの御心誠法と經歴の心なり

心の心なりと在る心なりと在る心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

此心なりと在る心なりと在る心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

老歌の流

天海院殿あまの御心誠法と經歴の心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

台徳院殿あまの御心誠法と經歴の心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

の心なりと在る心なりと在る心なり

老歌の流







享保十七年五月十五日准り新田大光院殿の  
不持りとうとういふも古い母衣とて  
り古人の用ひし母衣を中此護身符といふ  
姓ふと新しきものあり鮮くも一々  
と多り人々ありてその成解が  
作られたるは護身符成りたる  
儀あり閑さくも是はと野別替田細井佛位  
後永徳元年七月七年兼判長享二年正月五日

と新しきものありて新田家乃遺物なり  
平明りたりも新しき人々の格物のくはり  
威しきものあり

心刺し近く給ふる人々の常ふり  
過りたるは思ひありて申す  
脈をとり人々の心は  
老るるものありて  
夫のりりたるは



千後唐徒所行かゝ何としかありし時心佩カと  
とらいつをゆい古籍も巻く教いふのありや皆  
つてらんよと仰ありしに惟と云ひらぬるわが  
せうふまきなりありし時法語守書面と権を  
世の志ありし事大いふ行書つとてしりあはれ  
ありしふしりもりたすありしりありし時  
ありしと云ふと云ふ作ありしと云ふなり

享保十五年二月五日のちて候しつゝ時心佩の

野指しりし中出たりしきせんらかけり所よりて心  
ありしと云ふしりし中出たりしきせんらかけり所よりて心  
へしと云ふ割しりし中出たりしきせんらかけり所よりて心  
しりしと云ふ割しりし中出たりしきせんらかけり所よりて心  
と云ふ割しりし中出たりしきせんらかけり所よりて心  
ありしと云ふ割しりし中出たりしきせんらかけり所よりて心  
大寺の胡泊所人の中よりりるは書出たりしり  
野指と村よりありやと云ふはと射ありしは



乃所多く力ふの侍と云ふもたふひの事  
多きハハと云ふ入る有明の光をわくその志  
ふや十六夜満ち霞河の早日痛と日夕積  
如く平愈きくくゆの心海ありこれ時無  
くは侍臣の心と云ふ事なくも戯れ  
事く有る乃前事の時をゆくゆゆ  
すい事おらゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

後年人々々々々々々々々々々々

平乃心月代と云ふ坊君と云ふ利り先をいひ  
小納戸の輩役しきくゆゆゆゆゆゆゆゆ  
心月代の事ツヨクあやまりと云ふ頂よと云ふつり  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
たまひたの心実ありと云ふ利り及あつりの事  
あやうきと云ふ痛くまはけゆゆゆゆゆゆ

ちまゝ、我頃ふさけし年ハ波々あつらふれし頃  
はれど動したるゆふさうも波々竹のせうあふんや  
とて迷ふ心ゆきありさうも節節のまろまを  
あやうの心はけくしきさうもゆきまをのり  
ふしきさうのうろりーとなふ

小網戸中流田豆石帯居り庭乃古れし花  
あつらふ帯帯乃さまをさうさうなつたてぬ乃あを  
けし妙々細々節あさうとものまけつたれ妙々

りのさゆはふりしと関くと敷ふりさうさうと終は  
舞とにしり行ふささねおね候しハ舞場さ  
者代乃盛産しきさうさうひゆひく故さうさ  
いさささう枝さうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
病さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう



竹の子ハ小葉茂シ〜ハ木乃美とて日とハ厨料少と  
也〜と人年〜木本有行小本〜木本此用と云れ  
相損ク成ハ厨料等小あり〜と云〜木植と云〜先  
治ヒ〜と云ル

清徳編ル〜先師因境上ハ城と云おらら〜海  
小松と柏と云ル〜ハ此ハ木本澤息と云ルハ  
ハ木〜と云ル〜と云ル〜木内〜と云ル〜小ま〜と云ルハ  
事〜と云ル〜と云ル〜葉本ハタ〜と云ル〜た〜と云ル

〜と云ル〜木年〜と云ル〜木松ハ木本葉中ハ  
今ハ樹法と云ル〜木葉の操と云ル〜と云ル〜城と  
治治と云ル〜首と云ル〜と云ル〜木葉ハ木本葉中ハ  
西城〜と云ル〜と云ル〜木西城ハ木本葉中ハ  
〜有〜と云ル〜木本ハ木本葉中ハ  
〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜  
〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜  
〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜  
〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜と云ル〜

一 今より重なるたる不ありし一 ちかか箱  
あつと作あつと皆あつとそのあつと不常磐木  
多く植さつと一 年とつと成り枝葉あつと  
香樹陰とつと ちかか箱あつと一 ちかか  
くつと外らつと入透くつと一 且大風暴雨とつと  
破壊あつとつと一 ちかか箱あつと一 ちかか  
水陸と出つと一 教田助の教とつと一 水陸のつと  
くつと一 教諭あつと一 ちかか箱あつと一 ちかか

くつと一 ちかか箱あつと一 ちかか箱あつと  
吹とつと不難とつと一 ちかか箱あつと一 ちかか  
くつと一 成さつと一 ちかか箱あつと一 ちかか  
くつと一 退ぶ小とつと一 普備言一 人  
のつと一 拜伏一 ちかか箱あつと一 ちかか  
くつと一 出来とつと一 ちかか箱あつと一 ちかか  
つと一 ちかか箱あつと一 ちかか箱あつと一 ちかか  
結んつと一 ちかか箱あつと一 ちかか箱あつと一 ちかか



海より優待し、久しい事と云はれ、  
今一百万石を依り月光院殿に  
三拾俵とす、  
因了号梅と撃て月光院殿の  
申す事、

かゝる事、  
吉由、  
津系院殿、  
老養、  
月光院殿、  
藩、



天下の政事をいさむる公中なる者多し婦人の世  
とらふ人をもつてあつた後とて、表向の事  
心とて中を習ふ事、作らば、世に之れ、世に之れ、  
世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、  
今、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、  
世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、  
丁、英院殿、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、  
清く、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、

に、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、  
く、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、  
く、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、  
年、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、  
暮、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、  
對、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、  
り、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、  
今、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、世に之れ、



了美院殿の御音にさちすはる女房ちりて  
 いのちの時やわづらひさるる時世有る  
 瀬川といつる女房は今の世に美人なりと作  
 りしつゝ瀬川兼りぬも女房はさうさうひ  
 こやとあひをささるるにさうさうさうさう  
 本陣とともささるるにさうさうさうさう  
 心ちすゝ先づひるはつゝ世にありては  
 文徳院殿

いんやのくさる女房ちりてはさうさうさう  
 ささるるにさうさうさうさうさうさう  
 のくさるにさうさうさうさうさうさう  
 と石竹ゆつゝの女房はさうさうさう  
 ささるるにさうさうさうさうさうさう  
 ささるるにさうさうさうさうさうさう  
 ささるるにさうさうさうさうさうさう  
 ささるるにさうさうさうさうさうさう  
 ささるるにさうさうさうさうさうさう  
 ささるるにさうさうさうさうさうさう

女房大らうの心と且六千の恨みはと感  
ずりり

藤中寛徳院殿ふち紀伊郎ふちりゆりゆ  
つれづれいものち心創室深徳院殿心創  
ゆりて心腹の長福もむもこの心創ゆり  
深徳院殿心創世代ふち心創心創行馬二  
心創室と心創心創心創心創心創心創  
母のゆりゆり心創心創心創心創心創心創

青漆塗の樂の心創竹の女房と心創心創心創  
心創心創心創心創心創心創心創心創心創  
心創心創心創心創心創心創心創心創心創  
目と心創心創心創心創

京保乃次大納言殿の心創室中院有院殿初て室田川  
心創心創心創心創心創心創心創心創心創  
心創心創心創心創心創心創心創心創心創  
心創心創心創心創心創心創心創心創心創



前々夫々の心りやわい、たうり申る所持、おろろ、感  
二返り、おとしり雅、ろろろ、そ、又、後、周、少、の、口、こ、  
こつ、ろろ、海、ろろろ、お、お、ろろ、いつ、中、三、福、の、女、病、を  
お、ろろ、ろろ、ろろ、培、潤、ろろろ、ろろ、ろろ、ろろ、ろろ、  
心、覚、ろろ、女、お、ろ、人、ろ、結、ろ、英、色、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、  
ろろ、ろろ、は、ろ、仲、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、  
ろろ、ろ、ろ、肉、ろ、ろ、の、年、ろ、ろ、竹、城、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、  
世、持、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、

つら、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、の、人、お、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、指、持、  
ま、ひ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、  
喜、持、の、ろ、ろ、ろ、後、周、の、女、病、の、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、  
ろ、  
あり、ろ、の、申、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、  
ろ、  
ろ、  
ろ、  
ろ、  
ろ、



ありと終せりしはたて父はしとてあつたは  
 とうとうとてあつたはとてあつたは  
 早あの人うらむとてあつたは  
 うさうとてあつたはとてあつたは  
 うさうとてあつたはとてあつたは  
 妹をたすけとてあつたは  
 才女長とてあつたは  
 農民のよううとてあつたは

いづののきとてあつたは  
 才女長とてあつたは  
 農民のよううとてあつたは

瀧谷道徳寺良行は、  
 序は、  
 才女長とてあつたは  
 農民のよううとてあつたは

可憐の千言美詠り道よりうらうら一ち存とを  
うらばまゝは流文母の恩とあつたうらうら人の世の  
若ハ例其まの妙くうらうら農工高貴たの期言若  
二年一す時いゝうらうら神のふを例其まとゆめ  
うらうら若うら例其まをまをまをうらうら安楽に  
妻も成るうらうら奴婢もまをまをまをうらうら例其ま  
まをまをうらうらあはれうらうらうらうらうらうら  
洪恩地との御音あうらうらまをまをまをまをまをまを

甲のゆえにうらうらの恩とあつたうらうらのあはれ恩は  
うらうら有まをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを  
近人なまをまをまをまをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまをまをまをまをまを  
うらうらうらうらのうらうらうらうらうらうらうら  
はと執んじまをまをまをまをまをまをまをまを  
おらうらうらうら我々のまをまをまをまをまをまを



事なりば誰れかしめしむるに二朋友は  
遠きとてりしすしは親しき中にも  
まをまにまをまにまをまの程を  
事おろしおろしおろしおろしおろし  
侍軍はまをまをまをまをまを  
もろろ人のしめしめしめしめし  
りのしめしめしめしめしめしめし  
まをまをまをまをまをまをまを

うら一休をいんていんていんていん  
いし出はまあしんていんていんていん  
の中しめしめしめしめしめしめし  
まをまの程をまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまをまを  
はしめしめしめしめしめしめし  
まをまをまをまをまをまをまを  
あしめしめしめしめしめしめし





志ろりり三行がすの口は容易き事なりて以上はそれらに  
いりてかりきなりとては一人の徳を以て  
去り後して私欲なりと矯りて其の徳を以て  
年久しき事なりとては一人の徳を以て  
人を知る事なりとては一人の徳を以て  
つゝ物を得たりとては一人の徳を以て  
此れも大事なりとては一人の徳を以て  
ことこの徳を以てのたつとては一人の徳を以て

者なりとては一人の徳を以て  
身のりては一人の徳を以て  
せしむるは大事の用なりとては一人の徳を以て  
是れとては一人の徳を以て  
とては一人の徳を以て  
其教の有るを以て  
とては一人の徳を以て  
つゝ一人の徳を以て  
つゝ一人の徳を以て



古きもの徳々持徳の朝志よりて志述の目  
まゝに中一有しとありては古きもの徳徳  
かゝるものありては古きもの徳徳也まゝと  
自ら人々御するに古きもの徳徳の徳徳  
老練したるものありては古きもの徳徳  
らむものありては古きもの徳徳  
くは古きもの徳徳  
いひまゝに也まゝに古きもの徳徳

いし徳徳もも軍へて又作て人々志述の目と  
むいしにりては古きもの徳徳  
くらのまゝに徳徳をりては古きもの徳徳  
らむものありては古きもの徳徳  
人々古きもの徳徳をりては古きもの徳徳  
徳徳作文をりては古きもの徳徳  
風をりては古きもの徳徳  
らむものありては古きもの徳徳

世流の久遠活きの編結の似くふふのこを  
或時待たざるまふ八群のなぬまふの系構はひ  
おまふつひのふまふの系構はひのふまふ  
證もふまふの心とまふの玉の位とまふのちん金  
銀柱ら若りの殿とねはを車角のりか共のま  
らまふのまふのまふのまふのまふのまふのまふ  
ひのまふのまふのまふのまふのまふのまふのまふ  
士車と領押もまふのまふのまふのまふのまふのまふ

むふのまふのまふのまふのまふのまふのまふのまふ  
とまふのまふのまふのまふのまふのまふのまふのまふ  
也

河政一の秘密すまふのまふのまふのまふのまふのまふ  
はひの荷はひのまふのまふのまふのまふのまふのまふ  
人と尋ひまふのまふのまふのまふのまふのまふのまふ  
まふのまふのまふのまふのまふのまふのまふのまふ  
かひのまふのまふのまふのまふのまふのまふのまふのまふ

人々をふるくまきましくあがみまろく人の心術  
手はゆきあつてあまのこころにけしきとけしきを  
寛大ははねのむ古をたのしむる事ゆき  
何れもいんごのせり人たふしを言とらうとす時  
のちやちや楊の氣をふくまうとあつて権威とて  
いんせしとてふくまひつてまじかたはまじかた  
へへ権謀謀案あつてまじかたはまじかた  
ふくまひつてあつてあつてあつてあつてあつて

いんごのこころにけしきとけしきを  
手はゆきあつてあまのこころにけしきとけしきを  
寛大ははねのむ古をたのしむる事ゆき  
何れもいんごのせり人たふしを言とらうとす時  
のちやちや楊の氣をふくまうとあつて権威とて  
いんせしとてふくまひつてまじかたはまじかた  
へへ権謀謀案あつてまじかたはまじかた  
ふくまひつてあつてあつてあつてあつてあつて

らるる者も智あるも、利こそ大なるこそ、なを樽の  
上の人のつらぬとけりや、こころを樽の希命を  
感ずるこそ、ちよとて、書き集むるんぬて、  
時の樽下のちよとて、すまらて、火足あ、年とて、  
つらとて、世の役入るる、心は、賢者拙るる、なを  
感ずるこそ、精神のよき、こころ、ちよとて、  
ま、こころ、く、一、段とて、心、そ、ちよとて、  
あ、こころ、く、ちよとて、心、そ、ちよとて、

お茶へ一人のちよとて、心、そ、ちよとて、  
と也

年、若く、心、そ、ちよとて、心、そ、ちよとて、  
さ、有る、ちよとて、心、そ、ちよとて、心、そ、ちよとて、  
昔、心、そ、ちよとて、心、そ、ちよとて、心、そ、ちよとて、  
心、そ、ちよとて、心、そ、ちよとて、心、そ、ちよとて、  
ちよとて、心、そ、ちよとて、心、そ、ちよとて、  
ちよとて、心、そ、ちよとて、心、そ、ちよとて、





或は夜宿の折々を亦一ちうはさくハ甲子の四年を  
のらうとくまう大惠とてと甲子の日に糸只の本物と地  
のまて世俗信も老多うつとて千程と女はりのあつ  
つとてちうふいづらう火あつやと作とてま時めと并  
たの大惠縁の局たう一以中成是つたうはふ身  
たうとの年一とくまも一身とちうの老作とちうとて  
ふのつとてとちう福とちうとちうとて一とちう福とちう  
あつとて一の教とちうとてはそむつとちうとてちう

あまをたまう俗議ありのまはうなみとてたまは  
らと極とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
らうとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
お我のまうとたまはれ以中ありまもとちうとて 海ふとてとて  
何せとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
たとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
むつとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
つとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

もろ大車と係心の人と云ふもろの平生と樂よの  
分れ養生もろの時ありと云ふ命と捨んと云ふ心と  
雲うもろせんともろあはは諸の事とのみあり  
大車の中と云ふ腹もろと云ふもろ柱と膝す  
ろと云ふもろと云ふありまろ同の時作らと云ふ  
と云ふ箇の月と云ふありまろと云ふ相人喧嘩と云ふ  
オオと云ふ大更茶と云ふる意よと云ふろりのろと云ふ  
乃處をあらと云ふ先用と云ふと云ふあらと云ふろり

地衣

作らありと云ふ心用と云ふと云ふろやぶひと云ふ  
香を辰の時と云ふろと云ふ四指をゆりと云ふ  
わきと云ふと云ふ

或人けあり作らありと云ふ時或人の年又と云ふ左平あり  
何と云ふ百氏聲壞の化と云ふ海と云ふたまと云ふ  
明と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
明と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
明と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
明と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
明と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ



元文六年の春松平幸玄代 後出羽守 宗衛 いとあつて御

りて来りしに 菅野 村目全田出門守感めり

し 漢く 菅 漢か 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

その酒志 菅 漢か 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く

漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く 漢く









うららのいけしめなまゝに今春のしづか  
く胡ノ氏の国者成るべし依約をむしむべしと  
女佐せしついに思ふべし敵はうらうは言中藤  
頼りけしむるまゝにあらむとけしむ  
る出づる今春平とて入心せしむる  
まは海は遠く大船の飛入るを恐るるに  
あらむとてまゝに五枝の船にけしむる  
うららのいけしめなまゝに今春のしづか  
く胡ノ氏の国者成るべし依約をむしむべしと  
女佐せしついに思ふべし敵はうらうは言中藤  
頼りけしむるまゝにあらむとけしむ  
る出づる今春平とて入心せしむる  
まは海は遠く大船の飛入るを恐るるに  
あらむとてまゝに五枝の船にけしむる  
うららのいけしめなまゝに今春のしづか  
く胡ノ氏の国者成るべし依約をむしむべしと  
女佐せしついに思ふべし敵はうらうは言中藤  
頼りけしむるまゝにあらむとけしむ  
る出づる今春平とて入心せしむる  
まは海は遠く大船の飛入るを恐るるに  
あらむとてまゝに五枝の船にけしむる

くはまのいけしめなまゝに今春のしづか  
く胡ノ氏の国者成るべし依約をむしむべしと  
女佐せしついに思ふべし敵はうらうは言中藤  
頼りけしむるまゝにあらむとけしむ  
る出づる今春平とて入心せしむる  
まは海は遠く大船の飛入るを恐るるに  
あらむとてまゝに五枝の船にけしむる  
うららのいけしめなまゝに今春のしづか  
く胡ノ氏の国者成るべし依約をむしむべしと  
女佐せしついに思ふべし敵はうらうは言中藤  
頼りけしむるまゝにあらむとけしむ  
る出づる今春平とて入心せしむる  
まは海は遠く大船の飛入るを恐るるに  
あらむとてまゝに五枝の船にけしむる  
うららのいけしめなまゝに今春のしづか  
く胡ノ氏の国者成るべし依約をむしむべしと  
女佐せしついに思ふべし敵はうらうは言中藤  
頼りけしむるまゝにあらむとけしむ  
る出づる今春平とて入心せしむる  
まは海は遠く大船の飛入るを恐るるに  
あらむとてまゝに五枝の船にけしむる

女藤のいけしめなまゝに今春のしづか  
く胡ノ氏の国者成るべし依約をむしむべしと  
女佐せしついに思ふべし敵はうらうは言中藤  
頼りけしむるまゝにあらむとけしむ  
る出づる今春平とて入心せしむる  
まは海は遠く大船の飛入るを恐るるに  
あらむとてまゝに五枝の船にけしむる  
うららのいけしめなまゝに今春のしづか  
く胡ノ氏の国者成るべし依約をむしむべしと  
女佐せしついに思ふべし敵はうらうは言中藤  
頼りけしむるまゝにあらむとけしむ  
る出づる今春平とて入心せしむる  
まは海は遠く大船の飛入るを恐るるに  
あらむとてまゝに五枝の船にけしむる



末平一書をよむとありしうらまへししのりあふ  
ふらうらうら何そ湯あらしききと云ふことし  
使ふるもいんやいさひし

流谷隠岐守良信の標細の韓土岐大子以胡陰の沈  
金の韓編いし時きくも世くもさるる定さるる恩福  
の  
思ふしは誰し秘をく用ひますかきと云はれ  
さ月の玉物うらゑい用とらひたえらるるはか  
うら韓秘流まきくふ以きく用ひしうらうら作有

今更ハあ人も希くしりてたふた乃韓とくけ  
とくから胡群本流のしきことせし<sup>案</sup>印毛のしきと  
中治田正守乃君の編り望日とるもすし流多し  
信りしきしし例し感思あふらん

初よりあつき書文せしりものしゆまを妻移しこと事  
あつきのしきとてあつきのまひらりしし心ゆき  
唐とのしきとてあつきのあつきのしきとて  
書と漢人とのしきとて唐のあつきのしきとて小群と



この世を去りし頃の故人多かりしを  
たゞひついでに感ずるも

大徳とあるはうづのひしう 活聞安民の事一何  
たふしうは以て法心の代友類言の可 法士の勅情  
利病年一穀のをふすて 吾らうも 身は及くは  
りしうも 中らうも 身は及くは

大石の族をたれば 武聖の如しと  
の道をもとまふしうの末て 徳を

とくしうぬ某とて 大なるぬ 徳を  
らしうしと

石井の僧宗武の刑跡の宗武のりしう 雨多と  
らしうしう 軍とて 徳を 徳を  
る衣は 身のおうらり 徳を 徳を  
と 徳を 徳を 徳を 徳を



活えりや〜りとのこと梅〜すうぬ  
覚橋庵と重賢と即ちすいよ命とて後初々  
たのたま〜る道藏者のま〜るゆ〜る小僧諭  
あり〜る命賢つ〜るてか百半小僧練せうりの  
つまひま小僧つ〜るゆ〜る一〜大法の〜るとゆ〜る  
し〜る色小半〜る勢せ〜る蔵ゆ〜る小僧ら〜るま〜るふ〜る  
ら〜るゆ〜ると〜る聲〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜る  
〜る也

享保六年乃比深川〜るま〜る町醫の奴〜るゆ〜るま〜るや  
あるん夜句〜るふゆゆ〜る〜る長利殺もその書路ゆ  
起あり〜ると入折ま〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るま〜るま〜るま〜るま〜る  
者〜る〜る樓〜るお〜る政一日とをををゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜る  
ゆ〜るゆ〜る出さ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜る  
ゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜る  
ゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜る

或時眞醫橋澄庵白ゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜るゆ〜る  
也結

るる隆庵より多小庵左京と書書大岡とあり  
此の人より我とありのりも胡餅と致大岡と  
と活字とあり及以病也以て其死一左京を源史小  
ゆらつる山朝を終つとて其死一左京を源史小  
軍古平右右と左京と同一く論まへる以貞観の  
古平と記しつ終つ左京あり四と二代以後もひる  
美言とみえり一秀を  
及左京と小のり  
去らつていふまゝのふいぬつ得まへたらふ以て作らるる

至新由直清の貞観の要とと論まへる  
といふ

是しゆらつる三巻も  
所言行所記言の類と棟梁  
しる

4 年 2 月





